

地域課題を題材とした初年次科目「プレゼンテーション入門」の実践報告：
静岡大学新設の地域創造学環における試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂井, 敬子, 山本, 好比古, 山本, 隆太, 須藤, 智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010029

地域課題を題材とした初年次科目「プレゼンテーション入門」の実践報告

—静岡大学新設の地域創造学環における試み—

坂井 敬子（静岡大学 大学教育センター）

山本 好比古（静岡大学 大学教育センター）

山本 隆太（静岡大学 教職センター）

須藤 智（静岡大学 大学教育センター）

1. はじめに

本稿は、静岡大学で 2016 年度に新設された地域創造学環における初年次科目「プレゼンテーション入門」（以下「本科目」）について、その狙いや授業実践を報告するとともに、その成果と課題を明らかにするものである。

本学の地域創造学環は、学部横断型教育プログラムであり、2016 年度の 4 月には 52 名の第 1 期生が入学した。地域創造学環とは、地域が抱える様々な問題に対して、その解決案を提案し、さらにそれを実現できる人材を養成することを目指す¹⁾。学環では、学生は 1 年次の後期から、地域経営、地域共生、地域環境・防災、アート&マネジメント、スポーツプロモーションの 5 つのコースに分けられ、それぞれのテーマのもとに地域リーダーになるべく育成が図られる。また、基礎的な専門知識や技能は大学内で学び、フィールドワークや演習等で学外の様々な場所に飛び出して、実践力を養うことも、学環の学びにおけるポイントの一つである。

本稿で取りあげる 1 年次前期選択科目「プレゼンテーション入門」は、地域課題に取り組む人材としてのコ

ミュニケーション能力を涵養しようと開講されたものである。

2. 科目の設計

本科目では、レジュメ、パワーポイント、ポスターの 3 つのプレゼンテーション形態の実践を行うこととした。これらの学習においては、プレゼンテーションの技術だけでなく、資料を読み込むことや問題発見の要素を組み込み、地域課題の発見・問題解決の研究活動のためのアカデミックな基礎的スキルも身につけることを目指した。また、チーム活動をベースにした学習活動は、社会人基礎力などの能力伸長に有効であることが多くの事例において示されている（e.g. 中越・野原・林・川口・山崎，2014）。そのため、学生には、チームを編成して小研究への取り組みを課すことにした。また、学環が重視する学外での学びを実現するため、フィールドワークも盛り込むこととした。1 クラスの履修生は 10 数名とし、4 名の教員がそれぞれにクラスを担当することを想定した。各教員の専門に基づいたテーマをクラスごとに設定することとした。

上記のようなねらいに基づき、表 1 のように授業の流

表 1 計画された授業の流れ

フェーズ	該当回	概要
フェーズ 1	第 1～2 回	ガイダンス。この授業についての理解と、プレゼンテーションの概要の理解。
フェーズ 2	第 3～7 回	教員が指定した文献の輪読。レジュメを用いて担当範囲の概要をプレゼンテーションする。
フェーズ 3	第 8～13 回	3～4 名からなるチームを編成し、フィールドワークでの調査を盛り込んだ小研究を行う。進捗状況などをパワーポイントでプレゼンテーションする。
フェーズ 4	第 14～15 回	チーム単位での小研究をポスターを用いてプレゼンテーションする。最終回では、全クラス合同の発表会を行う。

注) 各フェーズに該当する授業回は目安。実際にはクラスの進行状況などによって前後した。

れが計画された。

3. 授業の実施概要

3.1. フェーズ 1: 概要の理解

このフェーズでは、本科目そのものについての導入と、プレゼンテーションの概要理解が図られた。

授業第 1 回は、授業そのもののガイダンスを全クラス合同で行い、シラバスを基に授業の説明を行った。コミュニケーション力を磨くために実践を通して効果的なプレゼンテーションができるようになるというのが授業の目標であること、レジュメ、パワーポイント、ポスターの 3 種類のプレゼンテーションを行うが、資料を読み込むことや問題を発見するといった基礎的スキルにも重点を置くといったことなど、授業について学生の理解を図った。

その後、履修希望者は、高校までのプレゼンテーションなどの経験や、社会人基礎力、静大版就業力能力について自己評価を問うアンケートに回答した(能力尺度はそれぞれ、日本インターンシップ推進協会(2008)ならびに坂井・須藤・佐藤(2013)を使用)。

52 名のアンケートの結果をみると、高校の授業などでのプレゼンテーション経験者は 33 名(63.5%)、高校の授業でパソコンを使いレポートを作成する機会があった者は 22 名(42.3%)、パワーポイントでスライドを作成したことのある者は 38 名(73.1%)、ポスター発表の経験者は 13 名(25%)であった。各事項についての経験者数は半数を超えたものもあるが、未経験者は決して少数とはいえず、本科目でのプレゼンテーションの実践が重要な機会になると考えられた。

また、「人前で話しをする事」や「パソコンで文章を作成する事」について得意であるかとの質問には、「あまり得意ではない」「全く得意ではない」といった否定的な回答が、それぞれ 59.6%、71.2%であった。「人前で話しをする事」についての苦手感は、本科目において克服すべき主眼でありその後の実践の効果が問われ

るところとなった。また、パソコンでの文章作成スキルは、当然のことながらプレゼンテーションを作成する準備段階では必須である。準備の大半は授業外の時間に行われることから、大きな課題になると考えられた。

本科目は選択科目であったが、地域創造学環 1 年生の全員(52 名)がこの科目を履修することとなった。

ガイダンス後、教職員は履修希望者をランダムに 4 クラスに振り分けた。各クラス人数は、教室の広さに応じて 10 名あるいは 14 名とした。2 クラスは 2015 年度に新設されたアクティブラーニング教室を、残りの 2 クラスは従来のパソコン演習室を使用することとなった。いずれも、授業中に学生の一人ひとりがパソコンを使用できる環境であった。

授業第 2 回は、クラスごとに分かれ実施された。プレゼンテーションとは何か、どんな方法があるのか、何が重要なのかといった、プレゼンテーションの概要についてのレクチャーがこの回の主題となった。

また、この次の回から、教員のそれぞれが指定した課題書籍の概要を学生が分担してレジュメを作成し発表するという文献輪読を行うことになっていたため、レジュメの作成方法やポイントについてのレクチャーも盛り込まれた。

これらのレクチャーの後、実際にパソコンを用いて、レジュメの作成を試みる時間を設けた。この 2 回目に限らず、本科目の授業時間には学生が個々にパソコンを用いる時間が短時間ながらも折に触れてあり、教員は、各自のパソコンスキルを観察し、具体的なアドバイスをを行うことができた。

3.2. フェーズ 2: レジュメを使ったプレゼンテーション

このフェーズは、各教員が設定したテーマに基づき、課題書籍の輪読を行いながら、テーマに関する知識を得て、その後の小研究の理論的な基盤を固めるところとなった(表 2)。履修生が 3~4 名のチームに分かれ(クラスによっては個人単位で)、課題書籍の担当

表 2 各教員がクラスに対して設定したテーマと課題書籍

クラス	テーマ	課題書籍
A	地域におけるユニバーサルデザイン・バリアフリー	A・B とともに、『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』 ²⁾
B	地域における高齢者福祉施設	
C	外国人観光客を受け入れる地域の問題	C・D とともに、『デービッド・アトキンソン 新・観光立国論』 ³⁾
D	外国人観光客を受け入れる地域の問題	

表 3 各クラスのフィールドワーク

クラス	場所	概要
A ⁴⁾	静岡市街地	市街地のユニバーサルデザイン、バリアフリーの状況を調査する。
B ⁵⁾	静岡市内高齢者福祉施設	地域にアピールし得る施設独自の取り組みや工夫を調査する。
C・D(合同) ⁶⁾	三島・修善寺の観光施設	外国人観光客を呼び込みもてなすための地域課題を調査する。

章を分担、作成したレジユメをもとに、概要を発表するというプレゼンテーションを行った。各チーム(あるいは個人)は、このフェーズの間に、2 回程度の発表を経験した。

プレゼンテーションが始まったこのフェーズから、教員のみならず、学生同士で互いの発表に点数をつけ合うというピア評価を取り入れた。同じ立場の学生から評価されるという緊張感を持たせると同時に、評価する側の視点を自己に内面化することによって、自らの発表の指針にし、振り返りの材料ともなることをねらったものである。教員が成績評価を行うときの参照材料としても用いられた。具体的な評価の方法やポイントは教員のそれぞれが各自の観点により設定し評価シートを作成、学生に配布し評価を求めた。今後の参考となるよう、ピア評価の一部は当該学生にフィードバックされた。

クラス B におけるピア評価の自由記述をみると、学生たちは他者の発表を通して、レジユメを用いたプレゼンテーションについて洞察を得たことが伺われた。具体的には、文献のポイントを効果的に伝える方法(わかりやすい言い換えや発表の流れの論理性など)、レジユメのビジュアルに関する工夫(図式化やフォントなど)、発表時の発声・口調、視線の運びについて、他者を模範にして真似したいといったコメントが多かった。自分の発表については反省点が挙げられていた。

3.3. フェーズ 3: パワーポイントを使ったプレゼンテーション

このフェーズでは、3~4 名からなる履修生チームが、授業最終回となる全クラス合同発表会でのポスター発表を念頭に置いて各自の小研究を遂行し、その進捗状況などについてパワーポイントを用いたプレゼンテーションを行った。

教員は、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの概要について、ポイントをレクチャーしたり発表のテ

ンプレートを提供したりなどの事前指導を行った。

各チームは、このフェーズの間に 2 回程度の発表を経験した。前フェーズと同様に、学生同士のピア評価が取り入れられた。

クラス B におけるピア評価の自由記述をみると、スライドのビジュアルや発声・口調・視線についてのコメントの他に、スライドの構成に関して「ストーリーを工夫したらよい」「説明をシンプルにしたらよい」などの指摘・アドバイスが、他チームに対しても目立った。クラス C・D におけるピア評価の自由記述を見ると、クラス B と同様のコメントに加え、質疑応答に関して、「質疑応答がゴタゴタになってしまった」や「質問の内容がアバウトだった」という自己反省のコメントも見られた。また、発表時の緊張感を反省するコメント(「緊張して早口になってしまった」や「みんな緊張していてすこし伝わりづらかったと思う」)もみられた。このフェーズでは、問いの設定、背景の整理、データ収集、答えの提示を自分たちで行うことが求められる。前フェーズよりも求められる活動が複雑多岐になっていることが、学生たちのコメントにも反映したといえよう。

3.4. フィールドワーク

通常の授業は学内で行ったが、第 2 フェーズから第 3 フェーズを経る頃、授業外の時間に学外で、テーマに関連したフィールドワークを行った。各クラスのフィールドワークの概要は表 3 に示した通りである。

このフィールドワークは、一度限り数時間のものではあったが、学生たちはそれを通して、本科目での学習があくまで地域を志向したものであり、フィールドの中では具体的に課題を検討できる意義があると理解できたのではないかと考えられる。

実際に、学生からは、「現地に行くことで地域の人々の話を聞いた」「実際にお店に入り、食べ物を食べたり、触り、いろいろ体験することができた」「行ってみなければわからないことがたくさんあった。自分で足を運ぶのが大切だと思った」といった感想が寄せられた。

表 4 各チーム(全 15 班)のポスタータイトル

クラス	発表タイトル
A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 静岡駅周辺のバリア——車いすの目線に立ってみよう ・ 静岡駅周辺に関するバリアフリーのフィールドワーク調査 ・ 三つの視点から見るバリアフリーの現状 ・ 静岡車いすまち歩きプロジェクト
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者施設と地域の関係——丸子の里が行う買い物ツアーの事例を通して考える ・ 地域に恩返しする高齢者福祉施設 ・ 未来の高齢者施設の在り方——地域に根差した施設づくりのために
C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外国人観光客に静岡でお金を落としてもらうためには？ ・ なぜ静岡県に観光客が少ないのか——京都と比較して ・ 三島・伊豆の観光地に外国人観光客を呼び込むためには ・ なぜ静岡は観光推進力が弱いのか？
D	<ul style="list-style-type: none"> ・ 三島・修善寺周辺の4条件 ・ アトキンソンによる観光4条件からわかる三島での町おこし——修善寺での観光の可能性について ・ 三島, 修善寺, 静岡 外国人観光客に親切か？ ・ おもてなしをしているか！？——三島&修善寺



図 1 最終発表会の模様

上記の教員主導のフィールドワークの他に、チームあるいは個人単位でさらにフィールドワークを行った学生もいた。

3.5. フェーズ 4:ポスターを使ったプレゼンテーション

このフェーズでは、各チームの小研究を総括し、ポスター発表としてプレゼンテーションを行った。

3.1 でみたように、入学までの段階でポスター発表の経験のある者は 4 人に 1 人しかおらず、まずはイメージを持たせることが重要であった。Web で公開されている他大学の事例を見せ、テンプレートを配布した。

学生チームは、授業の第 14 回から試験期間にかけて、各自の小研究を A0 サイズのポスターにまとめた。全 15 チームのポスタータイトルは表 4 の通りである。

最終発表会は、本学の期末試験期間が終わった翌週の 8 月 8 日に、アクティブラーニング教室の 2 室で

開催された(図 1)。発表会の冒頭に学環長からの挨拶と激励を受け、学生たちはポスター発表を行った。学内教員や地域住民が 10 名程度オーディエンスとして参加した。

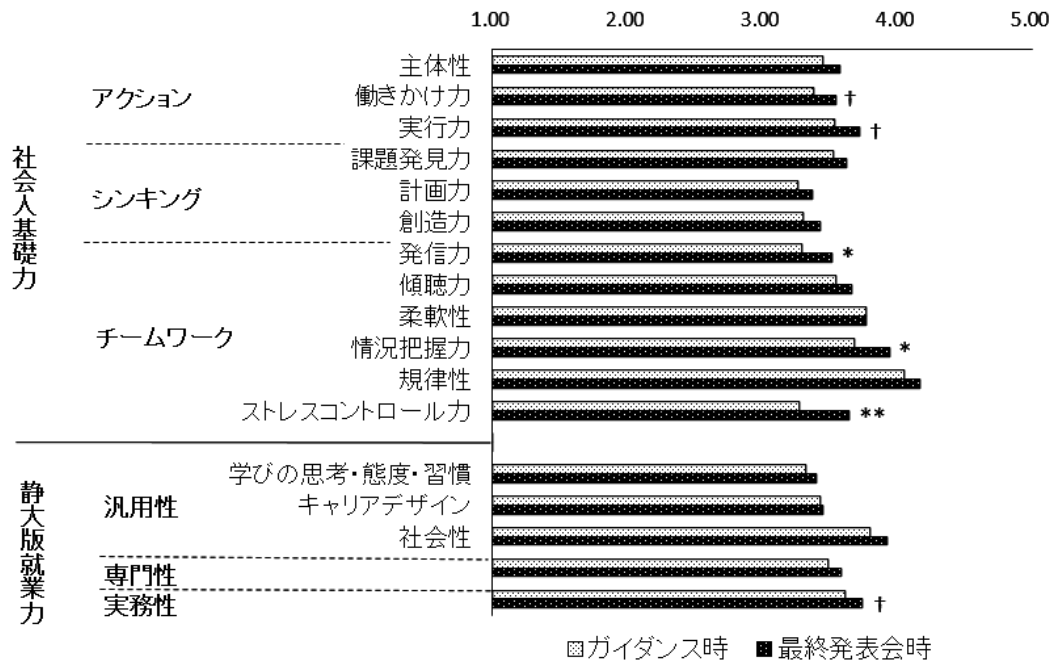
発表時間は休憩をはさみ約 90 分間設けられた。履修生はプレゼンターとオーディエンスの役割を交代しながら、小研究の成果を共有した。

なお、ここでのピア評価は、学生個々に 2 枚ずつシールを与え、最も良いと思われるチーム 2 班の発表にシールを貼付するという簡便な方法を取った。

また、この発表会の時間で、ガイダンス時に行ったアンケートを再度実施した。

4. 量的指標の変化にみる学生の成長

授業ガイダンス時から最終発表会時に行ったアンケートにより、社会人基礎力と静大版就業力の自己評価について、量的変化を統計的に検討した。対応のある t 検定により、2 時期の平均値差に有意な上昇のみられたのは、社会人基礎力の「発信力」($t(50)=2.21$, $p<.05$), 「情況把握力」($t(50)=2.60$, $p<.05$), 「ストレスコントロール力」($t(50)=3.24$, $p<.01$), また、有意傾向の上昇がみられたのは、社会人基礎力の「働きかけ力」($t(50)=1.83$, $p=.07$), 「実行力」($t(50)=1.97$, $p=.05$), 静大版就業力の「実務性」($t(50)=2.00$, $p=.05$)であった。全測度の得点とその変化は図 2 に示した通りである。



† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

図2 社会人基礎力・静大版就業力の自己評価の経時変化

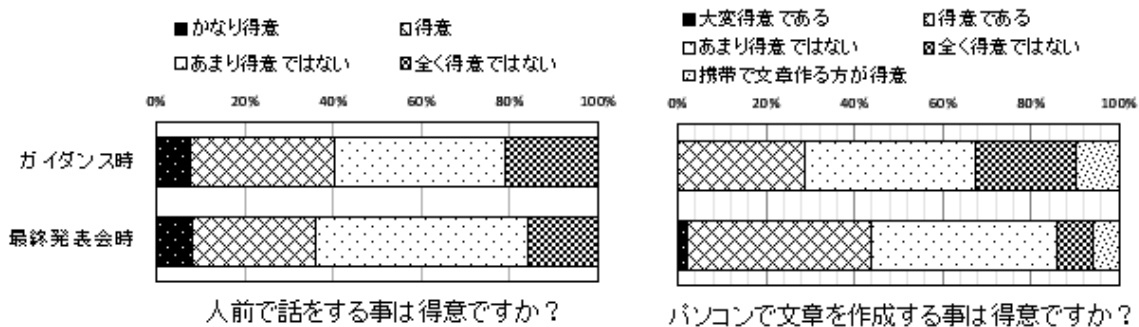


図3 「人前で話をする事」と「パソコンで文章を作成する事」の得手に関する自己評価の経時変化

また、3.1 でみた「人前で話をする事」と「パソコンで文章を作成する事」へのガイダンス時の回答について、最終報告会時との比較を検討した。図3に示した選択肢の分布の変化をフィッシャーの直接確率法により検討したが、統計的な有意性は得られなかった(それぞれ、 $p=.78$, $p=.14$)。それでも、「パソコンで文章を作成する事」に関して、「大変得意である」「得意である」という肯定的な回答の者は15名から21名に増加、「全く得意ではない」との回答は12名から4名に、「携帯で文章作る方が得意」との回答は5名から3名に減少したことには着目したい。

このような能力の自己評価の変化は、もちろん本科目だけにその理由が帰属されるわけではない。入学

から約4か月間の、本科目を含めた総合的な教育プログラムやその他の経験を経る中で、知識を深め、他者を観察し、自らも実践する中でノウハウや手応えを得ていったためであると考えられる。

一方、3.1 で述べたように本科目では特に「人前で話をする事」についての苦手感を克服することが主眼であったが、図3左をみるとそうできたとはいえない。しかし、レジュメ、パワーポイント、ポスターと、少なくとも5回のプレゼンテーション経験を積んで、学生たちはその「難しさ」に改めて気づきを得られたとも考えられる。本学のこれまでの実践においても、このような困難さへの気づきは重要であると指摘されている(酒井・須藤・坂井・日比・永山・野瀬, 2015)。

5. 成果と今後の課題

本科目では、地域課題に取り組む人材としてのコミュニケーション能力を修得するため、地域の抱える課題をテーマに小研究を実施するというタスクを通して、3つのプレゼンテーション形態を実践的に学習した。履修生は、チームを編成して他者と協働し、また、他者の遂行を観察し、効果的なプレゼンテーションについて学びを深めることができた。最終発表会では、他のクラスの履修者、科目外の教員、地域住民に対してもプレゼンテーションを行う機会を得た。

本科目の学修成果は、チーム学習によるところも大きかったように思われる。これまでの本学を含めた実践においても、自分とは異なる関心や得手を持つ他者との協働が、モチベーションやリフレクション、達成感を高めたと示唆されている(宇賀田・須藤・坂井・佐藤, 2015; 坂井, 2016; 呉・新井・謝・大沼・張, 2016)。

今後の課題として挙げられることの一つは、今回教員がそれぞれに作成・活用したピア評価シートを基に、クラス間で共通したルーブリックを開発することである。共通ルーブリックの開発によって、教員ばかりでなく、全履修生が明確な共通認識を期初から持つことが可能になる。成績評価の公明さにも与するだろう。

また、今回の成績評価の対象は複数回のプレゼンテーションの成果としたが、学生個々の遂行を評価しにくいという声が一部の教員から挙がった。チーム活動をベースとした授業科目においては、成績評価の対象とその方法も大きな課題の一つである。

引用文献

- 呉宣児・新井健一郎・謝志海・大沼久夫・張渭涛 (2016). ディベートを用いたアクティブラーニングの試み—国際コース1年前期「基礎演習」での取組— 共愛学園前橋国際大学論集, 第16号, 127-143.
- 中越元子・野原幸男・林正彦・川口基一郎・山崎洋次 (2014). チーム基盤型学習(TBL)と問題基盤型学習(PBL)を統合した授業「プレゼンテーション」の実践 京都大学高等教育研究, 第20号, 17-29.
- 日本インターンシップ推進協会 (2008). 「社会人基

礎力評価シート」がなぜ必要か

<http://www.jipc.or.jp/university/uni0500.html>

最終閲覧日:2015年1月28日

坂井敬子 (2016). 自治体・地域事業所と連携したPBL授業の実践報告—学生の振り返りにみるチーム活動と学習プロセス— 静岡大学教育研究, 12, 71-79.

坂井敬子・須藤智・佐藤龍子 (2013). 汎用的／専門的／実務的資質能力の学年による違いと学業成績の関連 第19回大学教育研究フォーラム発表論文集, 156-157.

酒井徹也・須藤智・坂井敬子・日比優子・永山ルツ子・野瀬元子 (2015). 地域産業会と連携したプロジェクトベースドラーニング型演習の実践報告 静岡大学教育研究, 11, 113-122.

宇賀田栄次・須藤智・坂井敬子・佐藤龍子 (2015). 地域金融機関との連携によるインターンシップ授業開発—体験型からPBL型への改善— 静岡大学教育研究, 11, 101-112.

脚注

- 1) 本学の地域創造学環についての全般的な情報は下記サイトにて公開されている。
静岡大学地域創造学環 Web サイト
<http://www.srd.shizuoka.ac.jp/>
- 2) 東京大学高齢社会総合研究機構(編著)(2013). 東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書 ベネッセコーポレーション
- 3) デービッド・アトキンソン (2015). デービッド・アトキンソン新・観光立国論 東洋経済新報社
- 4) 本フィールドワークについての報告は、下記 URL に記載。静岡大学大学教育センターWeb サイト「ニュースレター」
<http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/archives/3782>
- 5) 同上。
<http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/archives/3789>
- 6) 同上。
<http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/archives/3771>